



2009年12月2日放送

## 漢方頻用処方解説 黄連解毒湯②

慶應義塾大学 漢方医学センター 今津 嘉宏

### 現代の使い方

最近の研究によりますと、マウスインドメタシン誘導小腸潰瘍に対する潰瘍抑制作用があるとの報告を慶應義塾大学の渡辺陽子先生がされています。作用機序としては、マイクロアレイ法を用いた遺伝子レベルでの変化の検討によって、黄連解毒湯はインドメタシン投与により虚血、低酸素に陥った腸管組織において、虚血に陥った組織において増加し、adenosineレセプターを介して多形白血球やマクロファージの作用を阻害し組織保護的に作用するadenosineの分解酵素であるadenosine deaminaseを抑制し、adenosineを増加させることにより粘膜組織を保護している可能性があるとの報告されています。

「脳卒中易発症高血圧ラットにおける脳卒中発症関連タンパクの検索と黄連解毒湯の効果」に関する済木育夫先生の報告によると、脳卒中発症前後で脳卒中易発症高血圧ラット特有の血漿タンパクの変動が認められ、黄連解毒湯がそのピークの発現を遅延し、脳卒中発症の遅延作用と収縮期血圧を低下させる可能性が示唆されている。

2003年の「黄連解毒湯の高血圧症随伴症状に対する効果」についての多施設ランダム化比較試験において、黄連解毒湯投与群76例、非投与群67例の比較試験では、全般改善度は投与群が有意に優れていた。軽度の改善以上でも投与群に有意差があった。有用度も投与群で有意に優れていた。精神症状全般改善度は8週以降中等度改善以上で投与群が有意に優

れていた。自発性全般も8週以降中等度改善以上で投与群が優れていた。また、2003年に出された荒川らの「黄連解毒湯の高血圧症随伴症状に対する二重盲検比較試験」において、黄連解毒湯投与群103例、プラセボ群101例の解析結果では、のぼせ、顔面紅潮が優位に高い有効性を認め、興奮、精神不安、睡眠障害などの症状についてもプラセボ群を上回る改善効果を認めている。血圧降下度および効果有効率には両群間で有意差を認めなかった。

1991年の伊藤らの「脳梗塞に対する黄連解毒湯の臨床効果」についての多施設ランダム化比較試験において、黄連解毒湯投与群56例、非投与群52例の比較試験では、頭重感と回転性めまいとのぼせ、四肢しびれと四肢冷感と肩こりで有意に投与群が優れていた。精神症候、神経症候、日常生活動作改善度に差はないが、有用度で有意さを認めた。

### 適用ポイント・併用

黄連解毒湯は陽証で実証、比較的体力があり、体の中に熱があり、顔面の充血や精神不安、心悸亢進などのぼせ気味でイライラする傾向があるもので、咯血、吐血、下血、鼻血、脳溢血、高血圧、不眠、皮膚掻痒感、胃炎などを訴えます。舌は、赤味をおびて胖大。脈は数で大きく力があります。腹力は中等度で、心下痞鞭を認めることがあります。

黄連解毒湯を中心とする併用はたくさんあります。菊谷豊彦先生によると、桂枝茯苓丸と黄連解毒湯の併用は、皮膚疾患あるいは高血圧症といったものに用いることが多い。桂枝茯苓丸は瘀血を伴う症状を目標に用いるので、高血圧に瘀血症状を伴った場合には併用が非常によい。柴胡加竜骨牡蛎湯と黄連解毒湯との併用は、いわゆる実証に属する高血圧症、神経症、狭心症、自律神経失調症などで不安、不眠、イライラあるいは胸痛などの症状を呈する場合に用いる。四物湯と黄連解毒湯の併用は温清飲となり、補血剤の四物湯と清熱剤の黄連解毒湯の合方となります。口内炎、ベーチェット病、皮膚疾患に用います。当帰飲子と黄連解毒湯の併用は皮膚病とくに口渇、かゆみが強い場合で、なかなか痒みかとれないときに用いる。痒みが強くて比較的胃腸が丈夫な方、皮膚が乾燥、あるいはザラザラして熱感もあるような皮膚炎、アトピー性皮膚炎、湿疹に使う。

小柴胡湯と黄連解毒湯の併用は、慢性活動性肝炎で、非常に熱を持っている場合、赤ら顔でイライラしたり、あるいはそれ以外にも肝に熱を持っている場合に用います。大柴胡湯と黄連解毒湯の併用は、上腹角の拡大があり、胸脇苦満、便秘などの症状を目標に用い、高血圧、肝炎、腎炎、神経症などに応用する。四逆湯と黄連解毒湯の併用は、胸脇苦満、腹直筋緊張、神経症傾向、肩こりを目標に用い、腹診上、振水音などがある場合は用いない。神経症、自律神経失調症、急性・慢性胃炎などに用いる。

### 類方鑑別

鑑別すべき処方としては、まず三黄瀉心湯があります。三黄瀉心湯は黄連、黄芩、大黄の三味からできていますが、黄連解毒湯と共に清熱剤で、三黄瀉心湯には便秘という症状があります。次に白虎加人参湯です。白虎加人参湯は石膏剤であり、激しい口渇やたくさ

ん水を飲む、冷たい飲料を好む、あるいは発汗を目標として用います。清熱剤とくに清熱瀉火剤といわれています。滋陰降火湯は色が浅黒く乾性咳嗽があり、下痢しないものでかえって便秘のもので、黄連解毒湯は滋陰降火湯よりも腹筋の拘攣がある。滋陰降火湯より咳が出ないときは黄連解毒湯を用います。心悸亢進は、心の熱という診断で黄連解毒湯を用いる。

### 症例（大塚敬節）

大塚敬節（1900-1980）の『漢方診療三十年：治験例を主とした治療の実際』（創元社、1959）には、以下の症例が記されています。

「49歳の色白い中肉中背の婦人。ある夜、突然激しい動悸がして、びっくりして医師を呼んだ。この動悸はその後も時々起こった。その頃からのぼせが強くなり、耳鳴りが起こり、不安不眠を訴えるようになった。それに一日に何回となくかっとなり、汗が流れる。大便はときどき秘結する。月経は5ヵ月間とまっている。この症状を聞いただけで古人が血の道症と呼んだ更年期の症状であると診断し、黄連解毒湯を与えた。患者はこれを飲むと気分が落ち着いて大変楽だという。しばらく飲まないでいるとのぼせと不安、不眠が起こってくる。」という症例を報告しています。